

# モンゴル 本贈り現地 で交流

冷水真吾さんの指導にモンゴルの子どもたちは目を輝かせていた  
—04年撮影、いずれも神鋼環境ソリューション労組提供



阪神大震災(1995年)でいち早く救済物資を被災地に提供してくれたモンゴルと、草の根交流を続ける労組がある。神鋼環境ソリューション労組(神戸市中央区、川端健執行委員長)。2004年、最初にモンゴルを訪問して交流の芽を作ったが、不慮の事故で亡くなった仲間の生きた証しにと、現地に本を贈り続ける。先月下旬、4回目の交流団が訪問。現地の子ともちふれあい、亡き仲間への遺志をつないだ。

【桜井由紀治】

## 「神鋼環境労組」遺志つなぐ

交流団は持久走などでモンゴルの子どもたちとふれあった



阪神大震災の恩返し、部主将の冷水さんは、をしようと同労組は04年5月、現地では高価な本を贈ることを支援の柱にして第1次交流団をオプス県マルチン郡に派遣。歴史書や文書書など約150冊を贈った。そのメンバーの中に故冷水真吾さんがいた。バレーボール

部主将の冷水さんは、子どもたちにバレーボールも指導、子どもたちには目を輝かせ競技を楽しんだ。訪問は3年ごとに行動を深めていった。本の購入費は組合員がバザーや古本市を開いて収益を充てた。しかし、第2次



交流団メンバーとすっかり打ち解けるモンゴルの子どもたち

交流団が訪問した07年の12月、冷水さんが事故死した。27歳だった。初めてのモンゴル訪問で心を打たれ「大きくなっていく子どもたちをずっと見ていきたいな」と語っていた冷水さん。翌年、両親は「子どもたちに」とバレーボールを贈った。10年5月の第3次交流団には両親も参加。現地関係者は冷水さんを悼み、贈呈された本を収蔵している図書室を「冷水真吾記念図書室」と命名。郡民全員で大切に使うことを誓った。

今回の第4次交流団は、神鋼環境ソリューション労組6人とゲル1泊の神鋼線工業労組2人の計8人が参加。先月28〜今日4日の日程で訪問した。オプス県マルチン郡は首都ウランバートルから西約1000キロ。住民は遊牧で生計を立てた。

第1次交流団の冷水さんが指導して以来、すっかり盛んになったバレーボールの交流試合。交流団は、使い込まれたボールを見つけた。冷水さんの両親が贈ったものだった。子どもたちが大切にしていることを知った。

交流団長で同労組事務局長の三枝大輔さん(35)は「冷水さんの魂はモンゴルの地に生き続けている。ふれあうことの大切さを次の世代につないでいきたい」と話した。

約150冊の本のほか、スポーツ用品などを贈った交流団は、地域を挙げての歓迎を受けた。子どもたちは歌や踊りで感謝の意を表した。折り紙やそろばんを使った交流や持久走大会、モンゴル相撲などでふれあい、住民は交流団をゲルに招き、ごちそうしてくれた。